教育における丸暗記の効用に関する若干の考察

－初等教育から高等教育に至るまでの包括的な教育システム改革に向けて－

椿　光之助

（玄奘大學）

日本の科学技術イノベーションを支える人材を輩出するために、それぞれの時代の情勢に合わせた不断の教育システム改革が進められている。例えば、高大接続や博士人材のキャリアパス問題などは、日本の科学技術・学術政策の主要な検討課題であった。

本稿は、このような教育システム改革に資することを目的として、人的資本の考え方を用いながら、最近までネガティヴなイメージを伴う傾向にあった「丸暗記」に積極的な意義を見出す考え方を紹介する。具体的には、筆者自身が大学院修了に至るまでの勉強の中で感じた“「物事の名前の暗記」と「物事の順番や繋がりの暗記」の難しさの間にギャップがあるという認識”を紹介する。続いて、筆者が経験した範囲での大学院教育までの教育内容をざっくりと棚卸して、「従来は中学校以上で学んでいた内容のうち、小学校で丸暗記しても差し支え無さそうなもの」、「新たに小学校で学んだ方が良さそうなもの」、そして、それらをベースに、「中学校、高校、大学の教養課程、大学の専門課程、大学院の各段階において学ぶべき要素」を配列し直して、新しい教育システムのフレームワークを構築する。

その後、この新しい教育システムのフレームワークの中での「高大接続」の問題と「教養課程」や「リベラルアーツ教育」に関する課題について、若干の検討を行う。最後に、この新しいフレームワークを実装するための幾つかの注意事項や検討されるべき課題について整理して示す。